

論文番号 28

担当

滋賀医科大学 福祉保健医学講座

題名 (原題/訳)

Serum Gamma-Glutamyl Transferase, Self-Reported Alcohol Drinking, and the Risk of Stroke

GGT と自己記入式飲酒習慣調査と脳卒中の危険因子

執筆者

Pekka Jousilahti, Daiva Rastenyte, Jaakko Tuomilehto

掲載誌 (番号又は発行年月日)

Stroke. 2000;31(8):1851-1855

キーワード

Alcohol drinking, gamma-glutamyl transferase, stroke

要旨

背景と目的

飲酒習慣と脳卒中罹患の間の危険性についてはいくつかの知見がある。飲酒習慣について自己記入式を基にした調査はあてにならない。そこで、脳卒中と自己記入式の飲酒習慣調査と GGT との関連に焦点をあて、飲酒習慣を生化学的な視点から検討した。

方法

1982年と1987年に循環器疾患の危険因子を調査した25歳から64歳までのフィンランド人の男女14,874名を前向きに調査した。ベースラインで調査した自己記入式の飲酒習慣調査とGGT、喫煙習慣、血圧値、血清コレステロール、肥満度といった危険因子に関して検討した。追跡期間は1994年までとした。脳卒中の発症はコンピュータで国民動態調査と病院での登録調査とマッチングさせた。

結果

どの年齢階級においても、GGTは総死亡、虚血性疾患、脳卒中と関連がみられた。また男性においてGGTは脳内出血の危険因子であり、女性においてGGTはクモ膜下出血の危険因子であった。他の危険因子を調整した後でもこれらの関連はみられた。しかし、自己記入式の飲酒習慣の調査項目とは脳卒中のどのタイプにおいても関連はみられなかった。

結論

今回立てた仮説については立証できたと言える。というのは、GGTのような飲酒習慣を生化学的に見ることの出来る評価では脳卒中の危険因子との関連を明らかにすることが出来たからである。